

訳者あとがき

慎改康之

ポール・ヴェーヌ著『フーコーその人その思想』所収

これは MicrosoftWord によって作成した原稿を pdf 形式に変換したものです。

『フーコーその人その思想』に収録されているテキストと若干異なる部分があります。

## あとがき

本書『フーコーその人その思想』は、Paul Veyne, *Foucault, Sa pensée, sa personne*, Albin Michel, 2008 の全訳である。

エコール・ノルマルでは若き同志として、そしてコレージュ・ド・フランスではよき同僚として、歴史学者ポール・ヴェーヌは、哲学者ミシェル・フーコーと多くの時間をともに過ごした。この二人の関係を示すものとしてあまねく知られているのは、一九八四年に公刊された『快樂の活用』序文においてフーコーがヴェーヌに捧げた次の謝辞であろう。

P・ヴェーヌはこの数年間絶えず私を助けてくれた。彼は、まことの歴史学者として真なるものを探究するとはどのようなことであるかを心得ている。しかし彼はまた、真と偽のゲームについてその歴史を書こうとするやいなや入り込んでしまう迷宮も知っている。彼は、今日において稀な人々のうちの一人、すなわち、真理の歴史をめぐる問いがあらゆる思考にもたらす危険に対して立ち向かうことを受け入れている人々のうちの一人なのだ。この書物への彼の影響を明確に定めるのは困難であると言えよう（『快樂の活用』、田村俣訳、新潮社、一九八六年、一五頁）。

一九七六年の『知への意志』によって開始されたセクシュアリティの歴史に関する探究を進めるなかで、フーコーは、当初示されていた研究計画の大幅な軌道修正を決断することになる。十八世紀以降の性をめぐる経験を分析するためには、西欧の人間が古来どのようにして自らを欲望の主体として作り上げてきたのかを解明することが不可欠であると考えて、彼は、古代ギリシア・ローマまで遡って研究をやり直すことにしたのである。そしてそのような彼の新たな試みを支えたのが、古代ローマ史の専門家ヴェーヌであった。本書にも語られているとおり、彼は、フーコーが未知の領域に関して自ら収集した情報に裏付けを与えるとともに、その研究方法に対する共感を示すことでこの哲学者を励ましたのだった。ヴェーヌに言わせるとささやかなものにすぎなかったこれら二つの役割が、フーコーにとっていかにかけがえのないものであったかということは、前の謝辞から容易に推察

することができるだろう。歴史学者の友情と博識は、自らの慣れ親しんでいた地平から遠く隔たった領域に果敢に挑んだ哲学者に対し、最大の拠り所を与えてくれたのである。

一九七五年にコレージュ・ド・フランスの同僚として再会を果たして以来、二人の盟友は、それぞれのやり方によって相手の研究にたびたび言及していた。一九七八年には、一つのテキストがヴェーヌによってフーコーに捧げられる。「歴史を変えるフーコー」と題されたその論考は、「言説」や「多孔性」などといった哲学者の難解な諸概念のうちに、歴史研究においてそれまで混乱したやり方で用いられてきた方法を明確化する手がかりを見いだそうとするものであった（『差異の目録』、大津真作訳、法政大学出版局、一九八三年に所収）。そしてフーコーは、これに対して断片的なやり方で返答していた。コレージュ・ド・フランスにおける講義のなかで、彼は、暗示的ないし明示的なやり方によって、幾度となくヴェーヌの著作やその発言を引き合いに出していたのだった（『安全・領土・人口』、高桑和巳訳、筑摩書房、二〇〇七年、一四六、一八三、二九六頁、『生政治の誕生』、慎改康之訳、筑摩書房、二〇〇八年、五一六、三九二頁を参照）。そして一九八四年、わずかに年長の哲学者が一足先にその短い生涯を終える。それから二〇年以上の時を経て、そのように中断されてしまった知的交換を引き継ぎつつそこに最後の数ページを加えるべくしたためられた書物、それが、本書『フーコーその人その思想』なのである。

＊

そのタイトルが示すとおり、本書は、厳密な意味における研究論文というよりもむしろ、一人の友人によって描き出されたフーコーの知的肖像画である。実際、そこには、近い者にしか語ることでできない数々のエピソードがちりばめられている。同性愛的性向をめぐるユルム街時代の苦悩。イラン革命に際して物議を醸した選択の真相。さらには、コレージュ・ド・フランスのオフィスに残されていたゲイサウナのポスター。こうした逸話のなかに、読者は、フーコーその人の知られざる横顔を垣間見ることができるだろう。

とはいえ、友情によって彩られた哲学者の肖像に対し、それに固有の輪郭を与えているのはやはり、その思想に関して一人の明敏な歴史学者によってなされた精緻な分析である。本書の全体は、何よりもまず、フーコーが残した著作の意義を明確化しそれを読者に正確に伝えようという、もっぱら知的な配慮によって貫かれているのだ。フーコーをめぐる

しばしばなされるいくつかの誤解を指摘しつつ、ヴェーヌは本書の冒頭において次の二点を強調する。まず、フーコーは構造主義者ではないということ。そして次に、彼は一九六八年思想に属してもいないということ。

まず、フーコーは構造主義者であるという我々があまりにもしばしば出会う言明に対し、ヴェーヌは次のように反論する。なるほどフーコーは、思考が完全にそれ自身から生まれるわけではなく、それ自身とは別のものによって説明されなければならないということを確認していた。しかしだからといって彼は、人間を構造につなぎ止め、人間の主体性を決定論の支配下に置こうとしていたわけではない。彼は主体の自由を信じていたのだ。彼はただ、そのような主体が、至上の存在としてすべてを構成する者では決してなく、逆にそれ自身、対象化の作用と対をなすものとしての主体化の作用によって構成される者であるということを示そうとしたのである。自分は構造主義者ではないと絶えず主張していたフーコー自身の発言を、我々は真剣に受け止めなければならないのだ、と。

また、一九六八年の五月革命参加者たちの思想をフーコーのうちに見いだそうとするのもやはり大きな間違いであるとヴェーヌは言う。コレージュ・ド・フランス教授であり数多くの研究書の著者であると同時に、この哲学者は確かに、一人の活動家でもあった。しかし、たびたび街頭へと繰り出してデモや学生運動に参加するその一方で、彼は、その講義やその著書において、いかなる政治も決して説き勧めはしなかった。彼は、自分の戦いについて弁じ立てるのは無益であると考えていたのだ。思考を、政治的实践に対して真理の価値を与えるために用いてはならないということ。これが、この闘士が自らに課した第一の規則であった。とはいえ、それでもやはり彼の系譜学的歴史研究によってあらゆる制度の恣意性とあらゆる確信の無根拠性が暴き出されたのであり、人々はそこから既成の秩序と闘う動機を汲み取ることができたのだ。要するにフーコーは、闘うために必要な知識を人々に対して提供する、その一方で、行動のための処方を押しつけることのないように気をつけていたのだ。彼が自らの任務として引き受けたのは、馴染み深い自明性を消散させることであり、人々に対して何をなすべきか語ることは決してなかったのだ、と。

しばしば構造主義の代表者とみなされて、フーコーは、一方では痛烈に糾弾され、他方では熱狂的に称賛された。彼はまた、人々の政治的意志に形を与える者として崇拜されたり、逆に、行動しようとする者の意気を挫く虚無主義者として非難されたりした。こうした空騒ぎに、ヴェーヌは本書において決定的なやり方で終止符を打とうとする。読者をフーコーの著作そのものへ、そしてとりわけ、『ミシェル・フーコー思考集成』に収録され

ている数々のテキストへと送り返しつつ、そこで提示されている諸概念、「言説」、「装置」、「主体化」といった諸概念を綿密に検討することによって、彼は、一人の哲学者をめぐるさまざまな思惑のもとにこしらえられた偶像を徹底的に破壊しようとするのだ。

フーコーをめぐるイコノクラスムとしてのこの書物は、したがって、この哲学者の思想に初めて触れる読者にとってはやや高度にすぎるものであるかもしれない。しかし、フーコーを読み始めて間もない人々、あるいはある種の屈折を伴ったやり方でしか彼の仕事に触れたことのない人々、さらには多様性に満ちた彼の研究のある特定の側面しか知らない人々にとって、要するに、これからフーコーを読み進めるためのさらなる一歩をどのように踏み出せばよいかと自問している人々にとって、本書が提示する批判的考察は、またとない道標として役立つに違いない。そしてまた、古くからフーコーに親しんできた読者もやはり、歴史学者に固有の視点から照射される光によって、馴染み深い横顔に思いがけない表情が浮かぶのを目にすることができるだろう。究極的差異としての言説。唯一の実体としてのカオス。生成をもたらすものとしての諸原因の連鎖。さらには、アウグスティヌス、モンテーニュ、スピノザとの交叉。こうしたさまざまな要素に縁取られて、哲学者の新たな肖像が我々の前に描き出される。別のやり方で読む可能性が、ここに与えられるのである。

＊

翻訳にあたっては、本書の性質を考慮に入れつつ以下の点に配慮した。

まず、本書に登場する多数の人名については、巻末に索引を設け、そこに簡単な説明を加えておいた。また、人名以外の固有名詞や事項については、とくに読解に必要であると思われるものについてのみ訳注を付した。なお、出典指示などに関して見いだされたいくつかの誤りについても、本文中では原典の記述をそのまま訳出したうえで、訳注において訂正を施してある。

また、原注に挙げられた文献のうち邦訳のあるものについては、訳書の書誌情報のみを記載した。なかでも、本書の読解においてとりわけ重要であると思われる『ミシェル・フーコー思考集成』に関しては、読者が容易に該当箇所に行き着くことができるようにと、

参照されている論考や対談のタイトルも付しておいた。なお、引用箇所の翻訳に際しては、訳書を参考にさせていただきながら、訳語や文体の統一性という観点からそこに多少の変更を加えてある。

今回こそはと思いながら、やはり当初の予定通りに仕上げることはかなわず、筑摩書房の岩川哲司氏にはいつものとおり多大なご迷惑をおかけすることになってしまった。氏の寛容に対し、心からの感謝をここに捧げたい。

二〇〇九年十二月十三日

慎改康之